



名古屋市立大学
環境報告書
2010 (概要版)

Nagoya City University
Environmental Report 2010
Digest Version

**We are
pieces of Earth.**





TOGARI HAJIME
戸苅 創

理事長
(環境管理最高責任者)

平成23年3月11日午後2時46分、東日本にマグニチュード9.0のかつてない巨大な地震、東北地方太平洋沖地震が発生し、それに続く津波、福島第一原子力発電所での爆発火災事故と、我が国に未曾有の大震災が襲いました。亡くなられた方と行方不明の方は2万8000人を超えたことが判明しています。この震災は世界の注目する所となり、地球規模の環境破壊とも言われています。このような突発急激的環境破壊に加え、我が国には、経済危機、地球温暖化などの環境危機、少産少子に伴う社会危機、医師不足による医療崩壊、等々数々の危機が、相乗的に襲い、あらゆる環境が総てを破壊しようとしています。そのような中、公立大学法人名古屋市立大学は、「地球環境の保全に貢献する大学」、「持続可能な社会の形成に向け、教育、研究、社会貢献、等各種の活動を介して、環境問題の解決に挑戦し、貢献する大学」を実践しています。日本を代表する大都市名古屋市の中心に位置する、学生4000人、教職員1500人の大都市型総合大学として、地域でのLocalな社会貢献のみならず広く国内外にアクセスしGlobalな社会貢献を実践している大学であります。医学、薬学、経済学、人文社会学、芸術工学、看護学、の6学部とそれらに対応する6研究科にシステム自然科学研究科を加えた7研究科、さらに附属病院、附属研究施設に在籍する、総ての学生や教職員が、その幅広い専門分野の知識と知恵を集約し、環境に関連した学際的な研究を行っています。そのことで、持続可能な地球環境の保全に取り組んで行くことの出来る優秀な人材育成に寄与していることを矜持としています。

本学は、その環境憲章に「ヒューマン・アース・ライフ・プロジェクト (Human Earth Life Project: HELP)」というスローガンを掲げています。これは、環境対策に向けた意識の向上を計ることを目的としたもので、豊かな心でこのかけがえのない地球を次世代に残そうとする意識を共有するためであります。本学に根付いています「温故創新」、「Courage to Challenge」の精神が、各分野で数々のアイデア (Plan) を創出し、実際に運用し (Do)、そして評価 (Check) と見直し (Action) を繰り返してPDCA cycleを回すことにより、着々と成果を生み出しています。

本日茲に、本学の多くの分野の教職員によって平成22年度の成果の集大成が完成致しました。広く内外の多くの皆様にお目通しいただき、忌憚の無いご意見を賜りたいと存じます。

表紙絵について

本学芸術工学部・芸術工学研究科の学生・院生が、自らデザインした「COP10ノベルティ」を企業の皆様に提案しました。それらのデザインの中から、環境委員会が選出した、芸術工学部 井本直宏さんのデザインが、今年度の環境報告書の表紙絵となっています。



名古屋市立大学環境憲章

基本理念

健康・福祉の向上と環境問題の解決を二大課題とする名古屋市立大学では、こうした認識に立って、生物の多様性が失われつつある危機に直面した地球環境を救うために、教育と学術研究にあたって国際的視野と環境保全の意識を持ってそれを推進し、地球の持続可能な発展を目指しつつ、社会の調和と自然との共存に貢献するために英知を結集してその使命を果たすことに努める。

名古屋市立大学は、医学、薬学、経済学、人文社会学、芸術工学、看護学の6学部と自然科学研究教育センターおよびそれらに対応する大学院の7研究科、ならびに附属病院、附属研究施設などを擁した総合大学であり、幅広い専門分野の教育・研究を可能にする大学としての特徴を活かし、以下の基本方針に掲げる環境教育、環境に結びついた学術研究、そしてキャンパス内での環境保全活動等を積極的に推進するものである。

基本方針

- 1 環境に重点をおいた教育を推進するとともに、環境教育プログラム(コース)を充実させ、将来、持続可能な地球環境を保全し、環境問題に取り組んでいくことのできる意欲ある人材を育てていく。
- 2 学生の地域社会や学内における環境保全活動への自主的な参画・取り組みに対して積極的に支援していく。
- 3 地球を取り巻く温暖化問題、環境保全活動、生物多様性の保全に関連する学術研究を積極的に推進し、その成果を社会に還元することによって社会貢献をしていく。
- 4 環境に関連した公開講座、シンポジウム等を地域社会や企業などと連携して積極的に開催し、もって環境配慮の啓発活動を通して地域社会に貢献し、地球に優しい活動に持続的に取り組んでいく。
- 5 環境負荷低減のために、環境マネジメントシステムを構築するとともに、それに沿って環境行動計画(エコ・アクションプラン)を策定し、キャンパス内で光熱水料の節減を始め、省エネルギー・省資源に積極的に取り組み、実践していく。
- 6 附属病院および事務部門においては、物品調達に際してグリーン購入の推進を図るとともに、設備・機材等の利用にあたって廃棄物の減量化とリサイクル資源の活用を推進していく。
- 7 学内で構築した環境マネジメントシステムを絶えず見直すとともに、環境保全活動の成果(環境報告書)を監査し、それを広く社会に公表していく。
- 8 生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)を積極的に支援し、同時に環境配慮指針「COP10あいち・なごやエコ・イニシアチブ」を尊重し、その取り組みについて検討しサポートしていく。

スローガン

本学は、人間の豊かな心でこのかけがえのない地球を次世代に残す運動を、「ヒューマン・アース・ライフ・プロジェクト(Human Earth Life Project;HELP)」と呼び、これを全学の環境対策にむけた「スローガン」とする。



Action Plan 1

教育への取組み

教養教育科目および学部専門教育科目における環境関連科目の開講や、学部横断的履修コース「持続可能な社会形成コース」のプログラムとして環境関連科目を提供し、必要単位を修得した学生への修了証の交付等を行っています。また、大学院においては、学問的手法による分析、現地調査などによる研究を取り入れた授業科目が提供されています。



実習の様子(国際関係論3)

Action Plan 2

学生活動への支援

3キャンパスの大学祭(川澄祭、薬学祭、市大祭)におけるさまざまな取組み、地球環境問題を考えるきっかけを大学生自らが発信する大学生主体のネットワーク「なごやユニバーサルエコユニット」への参加など、学生の自主的な取組みに対して支援を行いました。



大学祭での環境クイズの様子

Action Plan 3

学術研究の推進

”International Symposium on Biodiversity Sciences 2010 ” Genome, Evolution and Environment”の開催、子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)、国連環境計画生物多様性条約事務局への学生派遣など、多方面にわたって、環境に関する学術研究の推進を図りました。



”International Symposium on Biodiversity Sciences 2010 ” Genome, Evolution and Environment”風景

Action Plan 4

地域社会等との連携

滝子キャンパスにおける「市民公開講座」の開講、名古屋市千種生涯学習センターとの共催講座の開講、「教えて博士!なぜ?なに?ゼミナール」、サイエンスカフェをはじめ、学内外で環境問題をテーマとする多くの取組みを行いました。



市民公開講座で参加者が熱心に聞き入る風景

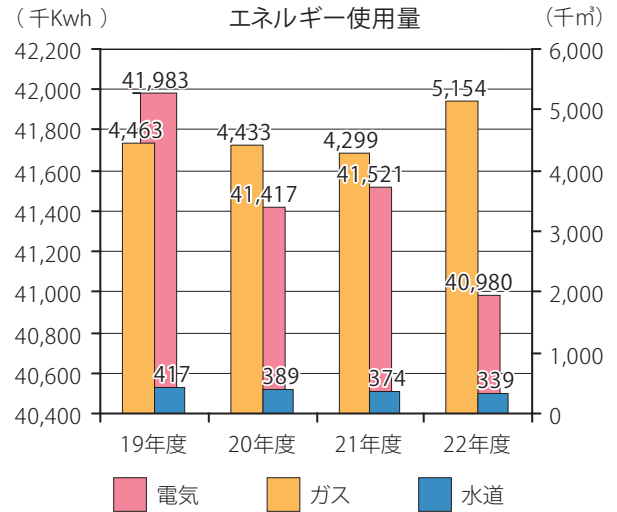


Action Plan **5**

環境負荷低減への取組み

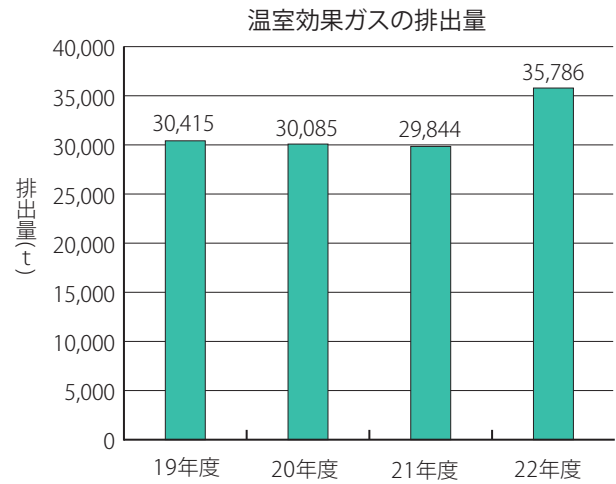
エネルギー使用量

22年度の大学全体のエネルギー使用量は、電気約4,098万kWh、ガス約515万m³、水約34万m³でした。平成22年度のガスの使用量は、21年度に比して大きく増加しました。30年に一度の異常気象と言われた記録的な猛暑のため、空調利用に際し、冷水発生に大量のガスを費やしたことが原因です。地球環境に左右されず、常時エネルギー使用量の削減を意識した行動が求められます。



温室効果ガスの排出量

平成19年度と比べて、平成22年度の温室効果ガスは、約5,371t、約18%の増加となりました。前述のとおり、猛暑の影響によるガス使用量増加に伴い、温室効果ガス排出量が増加しました。次年度についても引き続き温室効果ガスの排出量の削減に努めていきます。



Action Plan **6**

COP10への支援

生物多様性に関する市民フォーラム、講座・公開講座、学術集会、シンポジウム、サイエンスカフェ等を開催しました。

これまで、COP10への積極的な支援を継続的に実行してきたところですが、22年度はその集大成となりました。とりわけ、経済学研究科の香坂玲准教授は、多方面に対して生物多様性の重要性を発信し、COP10の開催、円滑な運営に絶大なる貢献を果たしました。



記念講演会「食からみる生物多様性」の様子

Action Plan **7**

その他の取組み

生協におけるペットボトルのキャップ回収、都市型風力発電システムの共同研究、大学施設・地域美化活動事業、エコスタイル運動への取組みなどを通じて、大学として環境配慮に取り組んでいます。

また、病院においてもさまざまな取組みを行っており、蒸気配管の保温工事や職員への啓発活動をはじめ、ハード面、ソフト面の双方から環境負荷低減に取り組まれました。



生協学生委員の皆さん



本学では環境憲章に掲げる基本方針それぞれに対して平成23年度を目標年度とした計画目標(34項目)を策定しています。平成22年度における自己評価は、以下のとおりです。

方針5については、取組みが遅れています。各教職員の意識啓発を含め、次年度以降積極的に改善の取組む必要があります。それ以外の項目については引続き目標達成に努めていきます。

(詳細は、本学ホームページにて、環境報告書の全文をごらんください。)

基本方針	計画目標 項目数	自己評価		
		○	△	×
1 環境に重点をおいた教育を推進するとともに、環境教育プログラム(コース)を充実させ、将来、持続可能な地球環境を保全し、環境問題に取り組んでいくことのできる意欲ある人材を育てていく。	4	3	1	0
2 学生の地域社会や学内における環境保全活動への自主的な参画・取組みに対して積極的に支援していく。	4	4	0	0
3 地球を取り巻く温暖化問題、環境保全活動、生物多様性の保全に関連する学術研究を積極的に推進し、その成果を社会に還元することによって社会貢献をしていく。	6	6	0	0
4 環境に関連した公開講座、シンポジウム等を地域社会や企業などと連携して積極的に開催し、もって環境配慮の啓発活動を通して地域社会に貢献し、地球に優しい活動に持続的に取り組んでいく。	3	2	1	0
5 環境負荷低減のために、環境マネジメントシステムを構築するとともに、それに沿って環境行動計画(エコ・アクションプラン)を策定し、キャンパス内で光熱水料の節減を始め、省エネルギー・省資源に積極的に取り組み、実践していく。	11	8	0	3
6 附属病院および事務部門においては、物品調達に際してグリーン購入の推進を図るとともに、設備・機材等の利用にあたって廃棄物の減量化とリサイクル資源の活用を推進していく。	1	1	0	0
7 学内で構築した環境マネジメントシステムを絶えず見直すとともに、環境保全活動の成果(環境報告書)を監査し、それを広く社会に公表していく。	2	1	1	0
8 生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)を積極的に支援し、同時に環境配慮指針「COP10 あいち・なごやエコ・イニシアチブ」を尊重し、その取組みについて検討しサポートしていく。	3	3	0	0
合計	34	28	3	3

<評価の基準>○:80%以上の実施・実現、△:50%以上、80%未満の実施・実現、×:50%未満の実施・実現

報告対象組織 桜山(川澄)キャンパス、田辺通キャンパス、滝子(山の畑)キャンパス、北千種キャンパス

報告対象期間 平成22年度(平成22年4月1日～平成23年3月31日)

準拠あるいは参考にした環境報告等に関する基準又はガイドライン等

環境報告ガイドライン(2007年版)(平成19年6月環境省)

作成部署及び連絡先 (策定会議)環境委員会

(事務担当)事務局総務課 住所:名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1 電話:052-853-8005

公表ウェブサイト 本学ホームページ(<http://www.nagoya-cu.ac.jp/>)